慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ソシオメトリー研究の発展と今日の諸問題(その三) : ソシオメトリー研究の部門別発展傾向(一)
Sub Title	The development of sociometry and its current problems (III) : the development of the theoretical aspectt of sociometry
Author	佐野, 勝男(Sano, Katsuo) 関本, 昌秀(Sekimoto, Masahide)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1960
Jtitle	哲學 No.38 (1960. 11) ,p.249- 280
JaLC DOI	
Abstract	The paper discussed mainly two problems: the present state of disjunction of Moreno's sociometry system and the others' evaluations of the theoretical aspect of his sociometry. The term "sociometry", as A. Bjerstedt indicated, is defined in many widely different ways by different authors now and has been used also by Moreno himself with changing connotations. Many different kinds of studies, therefore, are undertaken today under the same terms, "sociometry" or "sociometric." On the one hand Moreno resigns to this as inevitable process for a young science to a certain extent, and on the other hand he regrets it and says that it stems largely from the fact that the theories related to the various sociometric methods and techniques are not shared by all sociometrists. Since the theoretical aspect of Moreno's sociometry has many ethical and religious elements, it has been paid less attention by rigid scientists as compared with the other aspects, such as technical and therapeutic ones. Nevertheless there were a few persons who took notice of the former aspect. Johnson, sorokin, Wiese, Gurvitch and Znaniecki are representative scholars among them. The presents paper treated the evaluations by the first three persons. Johnson commerded highly Moreno's spontaneity-creativity theory as the basic one of "experimental theology", and Sorokin also approved the spontareity-creativity theory and psychodrama as the promising theory and technique of interpersonal relations although he found some faults with them. Wiese expressed great interest in Moreno's attraction-repulsion theory and measurement techniques from a view-point of his "Beziehungslehre."
Notes	横山松三郎先生古稀記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000038-0256

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ソシオメトリー研究の発展と今日の諸問題（その三）

――ソシオメトリー研究の部門別発展傾向(一)――

佐野勝男
関本昌秀

(三) ソシオメトリー研究の部門別発展傾向

(1) 今日の部門別分化の様相
(2) ソシオメトリー理論（考想）の発展

(1) 今日の部門別分化の様相

ソシオメトリー研究発展の歴史は、とりもなおさず、モレノのソシオメトリー体系解体の歴史であることは、すでに、ソシオメトリーの年代的発展傾向を取り扱つた前著の論文においてふれておいた。(1) 前稿でも述べたように、一九

三七年以後のソシオメトリスト達は、モレノの体系に含まれる幾多の側面を、おのれ自身の立場から勝手に取捨選択して、そのいずれか一つの側面のみに強い関心を示し、その部分だけを、他の諸側面との関連を無視して、個個ばらばらに発展させていつた。モレノは、一九四八年に出版された「社会心理学の現代の動向」に「実験的ソシオメトリーと科学における実験的方法」と題する論文を寄稿し、そこで、かような分化の様子について少しばかりふれている。[2] 彼はその中で「ソシオメトリーは、その広大な見解の中に、三つの研究部門を発達させた」と述べている。彼の認めた三つの部門とは、(1) 社会変動の側面（治療の側面）、診断の側面、測定の側面の一切を包括してはいるが、とくに治療の側面、すなわち古い秩序を新しい秩序によつて置き換えることに重点が置かれている力動的・革命的ソシオメトリー (dynamic or revolutionary sociometry) (2) 研究対象であるある特定の社会状況に対し、新しい秩序の導入が可能であるかどうかがはつきりしない場合、あるいはそれが不可能であることが、あらかじめわかつているような場合に、治療的側面を除去して、単なる調査、診断のために実施する診断的ソシオメトリー (diagnostic sociometry) (3) ソシオグラム、ソシオマトリックス、アクションマトリックスならびにそれに使われる数学一般を取扱う数学的ソシオメトリー (mathematical sociometry) の各部門である。そして、これらの各部門はたがいに重複しており、また、いずれの部門もそれ一つでは、本来のソシオメトリーと同一視することはできないと述べている。

一方、ネーネヴァジャは、一九五五年の「ソシオメトリー――ここ数十年の発展」と題する論文の中で、ソシオメトリーへの関心が高まり、研究資料が数多く集積されてくるに従つて、体系の分化が起り、その分化にともなつて、ソシオメトリスト達の間に、(1) その理論に関心を示した学者、(2) 集団精神療法の辺境を開発した学者、(3) 新しい調査技術を発達させた学者などが見分けられるようになつた。さらにこのほか (4) いまもなお、なに

よりも実質的価値のある調査、すなわち、内容に重点をおいた調査に活躍している学者が見受けられると指摘している。(3)

また、ブジャステットが念入りに企画して実施したアンケート調査の結果も面白い。(4) 彼はソシオメトリーがその発達にともなつて、多くの研究者からさまざまな形で取り上げられ、その定義も多種多様に下されていることを知つた。彼は定義のかような混乱が、いたずらに、研究者間の科学的コミュニケーションを妨げていると考え、一方また、ソシオメトリーはそろそろ統一的な定義をもたねばならぬ段階に達していると判断した。そこで彼は、まず、ソシオメトリーに関して従来下されてきた諸定義を、文献を綿密に調べることによつて丹念に整理してみた。つぎに掲げる十三種の定義は、彼によつて分類されたものである。

定義一 あらゆる種類の量的人間社会学および社会心理学を指す。すなわち一般に社会測定と呼ばれているもの……チェーピン (1940, 1943, 1947)、ベイン (1943)、ランドバーク (1943)、サンダーソン (1943)、スレトー (1947)、ガイガー (1950) などは、ソシオメトリーをこのように定義している。モレノもときには、この種の広義の定義を下している (1943, 1955)。(5)

定義二 あらゆる種類の間人間的関係（インターヒューマンリレーション）の量的研究を指す。この定義が定義一と違う点は、定義一が間人間的現象（インターヒューマンヘノメナ）をも含めて、一切の集合的人間現象（コレクティヴヒューマンヘノメナ）の研究を指しているのに、この定義は前者の間人間的現象の研究のみに限定されている。…… エングルマイヤー (1952)、ワード (1955) などは、ソシオメトリーという言葉をこのように定義している。モレノは、前稿においても述べたように、(6) 他人がくだしたソシオメトリーのかのような定義には、強い非難を浴びせておきながら、ときには自分みずから「ソシオメトリーとは社会的諸関係の測定を意味する。広い意味では、

あらゆる社会関係のあらゆる測定を指す」と定義をくだすこともあつた。(7)

定義三　われわれが、選択的関係（ある選択的状況に関して、牽引―反撥―無関係というような言葉で記述することのできる関係）と呼んでいる、ある限られたタイプの間人間関係に関する量的研究を指す。……ブロッフェンブレンナー（1943）はこの種の定義を採用している。モレノの主要な関心もまた、この選択的関係にあつたことは明らかである。だが、彼によれば、この関係は決して感情的な好き―嫌いの関係ではなく、ある特定の選択状況に関して行われる牽引―反撥の関係なのである。

定義四　被調査者の報告によつて表わされる間人間関係の量的研究を指す。相互作用の客観的観察などはこの定義から除外される。……キャテルとスタイス（1953）は、ある文献でこのような定義を採用している。

定義五　被調査者の報告にもとずいた選択的人間関係の量的研究。この定義は、定義三の制限（選択的人間関係のみ）と定義四の制限（被調査者の報告のみ）を組み合わせることによつて合成された定義である。

定義六　ある一定の被調査者の報告方法、すなわち正真のソシオメトリック・テストによつて表わされる選択的人間関係の量的研究を指す。このような定義を採用する場合は、ある特定の選択規準の設定が重要であり、またその研究結果が集団の再構成に利用されることが約束される必要がある。モレノは、しばしば、ソシオメトリーがかような定義にもとずく研究であるかのような印象を与える論述を行つている。

定義七　正真のソシオメトリック・テストによつて調査され、ソシオグラムによつて描写される選択的人間関係の量的研究を指す。

定義八　人間および動物に関するあらゆる種類の量的社会学と社会心理学を指す（定義一を拡張して、動物をも含

めた定義)。……モレノは、ときに、動物現象もソシオメトリーの対象となることを主張している(1945)

定義九　あらゆる種類の間人間的関係(インターヒューマンリレーション)および間動物的関係(インターアニマルリレーション)の量的研究を指す(定義二を拡張して、動物をも含めた定義)

定義十　選択的人間関係および選択的動物関係に関する量的研究を指す(定義三を拡張し、動物をも含めた定義)

定義十一　生活体の間の選択的相互関係(人と人、動物と動物、人と動物の間の関係)だけでなく、生活体と物体の間の選択的相互関係(人と物、動物と物との間)をも取扱う量的研究を示す。……モレノはときにはこのような定義を下したこともある(1954)

定義十二　以上の定義が示すようなある特殊部門というよりは、むしろ、自発性、創造性、ソシオメトリー革命などの諸概念をはじめとし、それらに結びついて考えられるあらゆるもの(たとえば心理劇、社会劇などにいたるまで)に関するモレノの思想を中心として形成された一学派を指す。(もちろん、モレノはしばしばかような定義を下している。ソシオメトリーの創始期におけるモレノの考えは、まさにこの定義によってよく表現されている……筆者註)

定義十三　その道の研究者によって、ソシオメトリーと名付けられたすべての研究を指す。

さて、ブジャステットは、この十三種類の定義を印刷した書簡を、二六九人の専門研究者に送り、今日、ソシオメトリーの定義として、いずれの定義が最も適切と考えるかをたずねてみた。彼が選んだ専門研究者とは、一九四五年から一九五五年の間に、一度でも雑誌「ソシオメトリー」に寄稿したことのある研究者(二〇〇名強)およびその関連領域の著名な社会心理学者(残りの五、六〇人)からなっている。もちろん、権威によるハロー効果を避けるため、各定義の提唱者の名前は伏せておいた。第一回目に回答を寄せたものは、書簡が送られた研究者の約五〇%、

一三一名であり、彼の分析はこの一三一名について行われた。第一表は、各定義を支持した研究者の人数とその%を示した表である。

第一表

	各定義支持者	
	人数	%
定義1	8名	6%
定義2	24名	18%
定義3	28名	22%
定義4	4名	3%
定義5	12名	9%
定義6	12名	9%
定義7	4名	3%
定義8	8名	6%
定義9	8名	6%
定義10	7名	5%
定義11	3名	2%
定義12	9名	7%
定義13	3名	2%
不明	1名	1%

ブジャステットの行ったこのアンケート調査は、筆者がこれから取扱おうとしている問題にとって、若干の示唆的な結果を報告している。まず注目しなければならぬ点は、ソシオメトリーという言葉について、今日までいろいろの学者によって、十三種類にもわたる異った解釈が下され、それぞれの定義にもとずいて、多種多様の研究が行われているという事実である。つまり、このことは、ソシオメトリーが、統一性なく多彩に分化していることを示している。第二に、ソシオメトリーという言葉が、今日では、多くの研究者によって、定義三および定義二のように解釈されているという事実である。ボガーダス (E. S. Bogardus) がアンケートへの回答の中で「ソシオメトリーは、定義十二で始まり、それから定義七のようになり、いまは定義三に移りつつある。」[8] と述べているが、この言葉はソシオメトリーの発展過程を端的に物語っている。第三に、これと関連して興味のもたれるのは、モレノ自身の回答である。彼は、ソシオメトリーの誕生期および揺籃期においては、あきらかに定義十二の立場をとっていたが、このアンケートへの回答では、定義二を選んでいる。モレノはこの定義二を、「誰が生き残るか」の初版において述べたソシオメトリーの定義、すなわち「集団諸成員の心理的特性の数学的研究、すなわち量化的方法からなる実験技術および量

化的方法の適用によつて得られた諸結果を取扱うところの、ソシオノミーの一部門が、ソシオメトリーと呼ばれる」という定義に最も近いものと解している。このことは、とりもなおさず、モレノが、ついにソシオメトリーを、彼のソシオメトリー体系の一部門である狭義のソシオメトリーに限定してしまつたことを示唆している。モレノの直系であるジェニングス（H.H. Jennings）もまた、定義二をもつて「ソシオメトリーを社会学や心理学の広大な領域から区別させる」最も適切な定義であると述べている。[9] このことも注目に値いする事実である。[10]

以上、モレノ、ネーネヴァジャ、ブジャステットなどによつて示されたソシオメトリーの分化傾向について述べてきたが、これらは今日のソシオメトリーの分化の様相をきわめて明確に描写している。ここで、筆者もまた、彼等とは別に、前稿で記述したモレノのソシオメトリー体系の解体という立場から、この問題を取り上げてみたいと思う。

さきに、モレノのソシオメトリー体系は、㈠ 社会集合体、単一集団ならびに集団群の、構造およびその力動性（ダイナミックス）に関する科学としてのソシオダイナミックス（sociodynamics）㈡ ソシウス測定の科学、換言すれば、ソシオメトリック・テストを基礎として、体系的に組み立てられた社会測定の科学としてのソシオメトリー（sociometry）㈢ 社会治療の科学、すなわち集団の非組織性ならびに集団内の個人の不適応を治療し調整することを目的とした実践科学としてのソシアトリー、さらに ㈣ それら三つのシステムの背後にあり、それらの相互関連を保たせる接着剤としてのソシオメトリーの理論（あるいは考想）から構成されていることを指摘した。[11] この体系は、ソシオメトリーの創始期および揺籃期（一九四〇年頃まで）には、まがりなりにもいちおうその雄大な姿をとどめていた。その後成長期に入るや、この体系はおしげもなく解体の道をたどり、今日では、四つの側面が、まつたく別の源泉から発達した領域であるかのような印象を与えるまでに分化してしまつた。この中で、最も多く学者の注目を浴び、最もよく発達したの

が、いわゆる狭義のソシオメトリーの部門であり、最も軽視され、最も未発達の状態のままに残されているのがソシオメトリーの理論の部門である。筆者は、以後、それら各部門の発達を (1) ソシオメトリー理論（考想）の発展 (2) 狭義のソシオメトリーの発展 (3) ソシアトリーの発展の順にしたがつて、簡約的に論述してゆくことにする。[12]

なお、モレノの体系の中では、ソシオダイナミックスという部門（これはレヴィン学派のグループ・ダイナミックスと同一視してもよいほど、多くの点で類似している部門である）が、一つの重要な部門として考えられているが、実のところ、この部門に関しては、これまでのソシオメトリーは独自できわだつた科学的貢献を果しているとは考えられない。この方面の貢献は、すつかりレヴィン学派のひとびとに御株を奪われてしまつたというのが偽りのない実状である。筆者のこうゆう考えに対して、モレノは、対人倫理（interpersonal ethics）を知らぬ寄生動物（parasites）[13]の味方と非難を浴びせるかも知れない。事実、「誰が生き残るか」（改訂版）の序幕（preludes）の中に設けられた「グループ・ダイナミックス」の一節で、モレノは終始レヴィンを攻撃し、グループ・ダイナミックスはソシオメトリー家から奪われた幼児の成長した姿であることを強調している。[14]

ひとびとはよくソシオメトリーとグループ・ダイナミックスを比較して、両者が多くの点で一致していることを指摘している。それもそのはず、グループ・ダイナミックスはソシオメトリーの一分派なのである。一九三五年に、モレノとレヴィンはマーロー（A. Marrow）を介して初の対面を行つた。これについで、その年のうちに数回の談合がもたれ、そこで、集団理論、集団的方法、行為理論、アクション・プラクティスなどに関するモレノの考想（ideas）が、はじめてレヴィンに披露された。その翌年に突然、これまで集団や行為（アクション）のダイナミックスを扱つたことのないレヴィンが、集団雰囲気に関する実験を開始した。いうまでもなく、この実験の基礎をなす理論や実験方法はモレノからの

借物であつて、レヴィンは、ただそれをゲシュタルト心理学やトポロジー心理学において彼が修得した概念や経験とたくみに化合させたまでのことである。その証拠に、集団の民主的、専制的、自由放任的構造に関する実験的研究は、一九三六年に、すでにモレノとジェニングスによつて、「ソシオメトリー評論」に報告されていた。[15] レヴィンは自分自身についで、今度はリピット（R. Lippitt）をはじめとし、のちにレヴィン学派の指導的な立場を占めた多くの有能な弟子達をモレノの研究所へ送り込んだ。彼等はそこで、心理劇、役割演技、その他のソシオメトリーの諸技術を修得し、再びレヴィンのもとへ帰つていつた。狡猾にもレヴィンは、かようにして取りうるかぎり、モレノの知識を吸収しておのれのものとしてしまつた。レヴィンの理論には、一面たしかに独創的なところがあつた。しかし、集団や行為のダイナミックスに関する彼の実験的研究には、全く独創性がみられず、ほとんどがモレノの猿真似であつた。このようなずるさは、レヴィンだけでなく彼の弟子達にもみられた。彼等はモレノの指導を受け、彼から集団ならびに行為のダイナミックスに関する実験的方法を学びとつておきながら、その研究論文には、意識的に、モレノならびにモレノの直系の弟子の研究を引用することを避けた。そして自分達の仲間の研究だけを、おたがいに引用し合うというずるい手段をとつた。それ故、今日、世間一般のひとびとは、レヴィンのグループ・ダイナミックスの考想の出どころが、モレノにあつたことを見落してしまつている。こんな仕打を受けながらも、モレノは「子供をもつことのできない人がいるように、いかなる考想も創り出すことのできぬ人もいる。だから彼等は、私の考想を採用しているのだ。要は、彼等がその義務を充分に果し、その考想を立派に育ててゆくかどうかである」[16]と、ひとり自分にいいきかせながら今日まで黙つてきた。しかし不幸なことには、グループ・ダイナミックスのひとびとは、モレノの考想を歪めた異説を公にしてしまつた。そればかりか、彼等はその考想を、いわゆる実験室の中で実施している。モレノの考

想は、けつして人為的な実験室の中で生かされるものではない。事態がここに至つては、もう黙つていられなくなつた。

以上が、ソシオメトリーの優越性を説くモレノの主張であるが、このような主張に対して、賛意を表するひとも少なくない。わが国の外林氏などは、この主張を全面的に認めている。[17] また、バージェスも、ボガーダス（E. Bogardus）、ウォーナー（L. Warner）レヴィン（K. Lewin）などの名と結びついたさまざまな発展は、ソシオメトリーの部門における新しい動向を示すものであると述べている。[18] たしかに、モレノの主張の中には、多少、うなずけるような事実も認められる。しかし、たとえレヴィンをはじめとし、その学派のひとびとが初期の研究において、モレノの考想を真似したとしても、それは単なる猿真似ではなかつた。それはあくまでも、自分達の理論体系をより完全な姿に発展させるため、他の関連領域にみられる理論や研究法の長所を利用し摂取したまでのことである。けつしてモレノの云うように、レヴィンが独自の考想（アイディアー）を持ち合せなかつたわけではない。その証拠には、一九四〇年以後のグループ・ダイナミックの傾向は、モレノの唱えるソシオダイナミックスとは、かなり様相を異にしたものになつていつた。この事実は誰しもが認めるところだろう。その巧みな理論構成と調査・研究法には、モレノを乗り超えた素晴しいものがうかがわれる。これにひきかえ、モレノが提唱するソシオダイナミックスの部門の研究は、一九四〇年を境として停滞状態にいり、狭義のソシオメトリーの部門の華やかな進展のかげに、すつかり身を潜めてしまつた。そしてこの方面の研究は、その後レヴィン学派のひとびとに完全にお株を奪われてしまつている。

かようなわけで、筆者は、モレノが提唱したソシオダイナミックスの部門の独自の発展と貢献を軽視したのである。[19] また本稿において、この部門の論述を削除したのもこのためである。

註(1) 佐野勝男　関本昌秀「ソシオメトリー研究の発展と今日の諸問題（その二）――ソシオメトリー研究のその後の発展（年代的発展傾向）」――哲学第三十六集　昭和三十四年　三一―六六頁

(2) Moreno, J. L. Experimental sociometry and experimental method in science. In W. Dennis (Ed) *Current trends in social Psychology.* 1948, p. 222, or Moreno, J. L. *Sociometry, experimental method and the science of sociometry,* 1951, p. 32.

(3) Nehnevajsa, J. Sociometry: decades of growth. *Sociometry,* 1955, 18, p. 314.

(4) Bjerstedt, Å. *Interpretations of sociometric choice status: studies of workmate choices in the school class and selected correlates—with special emphasis on the methodology of preferential sociometry,* 1956.

(5) 各研究者の文献は、煩雑を避けるため、年号を記すだけにとどめておく。詳しくは Bjerstedt の原典を参照していただきたい。

(6) 佐野勝男　関本昌秀「ソシオメトリー研究の発展と今日の諸問題（その一）――モレノのソシオメトリーの背後にあるもの」哲学第三十五集　慶応義塾創立百年記念論文集　昭和三十三年　五〇九――五三四頁

(7) Moreno, J. L. *Sociometry, experimental method and the science of society: An aproach to a new political orientation.* 1951, p. 7.

(8) Bjerstedt, Å. ibid. (1956) p. 27.

(9) Bjerstedt, Å. ibid. (1956) p. 27.

(10) このほか、著名な研究者が選んだ定義を拾ってみると、R. B. Cattell や C.P. Loomis は定義一を、C. Proctor は定義二を、G. Allport は定義五を、K. W. Back, M.E. Bonney, M.L. Northway などは定義六を、R.F. Bales は定義九を、E.L. Hartley, F. Znaniecki, F.S. Chapin, R. R. Blake は定義十一を、M. Mead, J. Nehnevajsa, R. L. Solomon などは定義十三を選んでいた。

(11) 佐野勝男　関本昌秀　上掲、昭和三十四年の論文　五一四頁

(12) 制限紙数の都合上、(2) 狭義のソシオメトーの発展、(3) ソシアトリーの発展についての論述は、つぎの機会に廻すことにした。

(13) Moreno, J. L. *Who shall survive?: Foundations of sociometry, group psychotherapy and sociodrama. (revised)*, 1953, p. c.
(14) Moreno, J.L. ibid. p. xcix~cvi.
(15) Moreno, J. L. & Jennings, H. H. Advances in socimetric technique. *sociometric review*, 1936, p. 26~40. (Moreno, J. L. *Sociometry, experimental method and the science of society*, 1951, p. 76~91. に再録されている)。
(16) Moreno, J. L. *Who shall survive*, (revised) 1953, p. c.
(17) 外林大作「レヴィン」(馬場明男　早瀬利雄編「現代アメリカ社会学」昭和二九年　二五一—二五六頁
(18) Burgess, E. W. Research method in sociology. *Amer. j. Sociol.*, 1944, p.
(19) 筆者は、いずれ稿を改めて、グループ・ダイナミックスの発展と今日の問題について筆を執りたいと思う。できたならばその際、ソシオダイナミックスについてもふれる積りである。

(2) ソシオメトリー理論（考想）の発展

ソシオメトリー体系の理論的側面も、ソシオダイナミックスの部門とともに、世人に比較的顧みられなかつた側面である。モレノも「ソシオメトリーの諸技術、なかんずくソシオメトリック・テスト、心理劇、社会劇、役割演技の技術は、いまや広く世に応用されている。だが、ソシオメトリーの理論は論争の的となつている。ソシオメトリーに関してたがいに相容いない見解が生じているのは、ソシオメトリーのいろいろな方法や技術に関連する理論が、ソシオメトリストのすべてに共有されていないためである。……（中略）……しかし、一学派の思想というものは、それに意識的あるいは無意識的に付着している価値体系が、一字一字綿密に読まれ、私心のない気持で精密に吟味されなければ、生き残ることはできない」[1]と、今日、ソシオメトリーの理論的側面が軽視されていることを認め、これを嘆いている。

モレノの唱えるソシオメトリーの諸理論はきわめて独創的で難解ではあるが、その中には、かなり興味をそそる示唆的な理論もみられる。それにもかかわらず、彼の理論がほとんど顧みられなかつたのは、すでに体系解体の理由を述べた際に挙げておいたように、彼の理論があまりにも複雑であるばかりか、宗教的倫理的な臭が強く、そこに用いられる概念や用語も、彼からじかに手解きを受けたものにしか理解できないような秘教的なものであつたからであろう。この点は、ルーミスなどから、こつぴどく批判されている。「モレノから、じかに手解きを受けたわずかな人にしか意味のとれない複雑な考想（アイディアー）と奥儀的な用語は、関連領域の研究者とのコミュニケーションに障壁を築いている。……（中略）……この雑誌（ソシオメトリー）の将来の編集方針には、(1) 表現の明瞭化、(2) 目的、仮定、仮説の注意深い陳述、(3) 他の研究者達によつて、計算が繰返され、やりなおされるように、もつと基礎的なデータを示しておくこと、(4) いかにデーターが処理されたかについての、もつと明確な陳述、などの要求を考慮することが望まれる」[2]というルーミスとペピンスキーの批判は手厳しい。モレノの頭の中では、すつきりとしており、また統一的によく関連づけられている諸理論や諸概念も、第三者には全く厄介なしろものとしか受け取れない。外林氏はこの辺の事情を面白く書いている。「かつて、私はモレノが俳優か、教祖か、あるいは学者であるかという問題を考えたことがある。というのは、彼はどんな「役割」でも実にうまくこなせる名人（ソシオメトリスト）だからである。また、彼ぐらいよくものを一つ一つ考えこなしている人も少ないであろう。彼は日常の一つ一つの経験のただの一つでもとりにがさない。それを矛盾なく全部彼のソシオメトリーの中に注ぎこんでいる。だから、彼の頭の中には何一つ分裂したものがない。一事が万事すべてうまく、関係づけられている。そのために彼の全貌を伝えることは非常に困難になつてくるのである。どこからでも彼に接近してゆくことはできるが、なかなか果しがなく、やつかいな

人物である。」(3)

このように多くの学者から酷評を受けながら、それでもなお、モレノの理論は、なん人かの学者によつて注目されてきた。ジョンソン (P. E. Johnson)、ヴィーゼ (L. von Wiese)、ソローキン (P. A. Sorokin)、ギュルヴィッチ (G. Gurvitch)、ズナニエッキ (F. W. Znaniecki) などはその代表的なひとびとである。以下、前三者が注目したモレノの理論的側面を順を追つて略述してみよう。

(A) ジョンソンの評価について

再三述べてきたように、モレノの理論的思索は、彼のソシオメトリーの前提思想として重要な意義をもつていた。しかし、一方この思索は、科学以前のものを多く含んでいるとして、多くの学者の批判の的となつていた。なにもわざわざ、哲学的、宗教的思索に頼らなくとも、実証的調査結果にもとずく諸命題の体系化によつて、人間行為（ヒューマンアクション）の理論は立派に完成しうるというのが彼等の批判であつた。このような批判に対し、モレノは、哲学的、宗教的思索は、科学的探求へのインスピレーションとして重要な役割を果すものと確信しており、また純粋な科学的思索と科学的技術にもとずいて打ち建てられた諸命題の中にも、宗教的思慮は本有的に具つているものだと考えていた。(4) この特異な考えに共鳴する学者はほとんどみられなかつたが、ジョンソンはこの考えを高く評価した。

彼によれば、科学はそれだけでは決して完全な姿とはなり得ない。あらゆる科学的操作の背後には、かならず哲学的な仮定や仮説が存在する。ところが、今日、多くの科学者は、価値を一切含まない事実のみを取扱わねばならぬと強固に主張する。彼等はたしかに彼等なりの貢献をしている。しかし、彼等の貢献は人間生活にみられる差迫つた要求からは遠く離れた抽象的な貢献にしかすぎない。科学は記述的であると同時に規範的でなければならない。また

理論的であると同時に応用的でなければならない。つまり、真理の価値を求めると同時に、かような真理を他の価値との関連において利用していかなければならない。一方また、今日の科学者は、要因分離（isolation）こそ科学のなによりの仕事であるかのように考えている。その効果をより正確に測定するために、一つ一つの変数を他のあらゆる要因から分離してしまうことに努力している。孤独な科学者は象牙の塔に籠ってしまい、効果のない分析によって、全体を原子論的な要素に分解してしまっている。しかし、このような手続は社会科学の手続ではない。というのは、社会科学は複合的な社会関係において作用し合う生きたひとびとを研究する学問である。生活を細かく分解することは、それを殺してしまうことになる。ヤコブ・モレノは、かような誤れる科学観を見事に克服して、新しい相互関係の心理学（interpersonal psychology）を発展させた。彼はなによりも実践的な価値を重んじ、また、あるがままの姿で社会や人間の相互関係を把えようと努力した。(5)

一方、彼はその相互関係の心理学の骨組として、卓越した哲学理論を開陳した。その哲学理論は神学的輪郭を具えている。モレノの科学―治療的研究の背後には、実験神学（experimental theology）的な考えが存在している。神は万物の父であり、あらゆる創造物に対して、意のままに創造的エネルギーを与えてくれる。神は遠い過去に住むわけでもなく、また遙か彼方の天上に住むわけでもない。神は現在のあらゆる事象の中に、またあらゆる経験の中にわれわれとともに住んでいる。教会、書籍、信経、神学などにおいて、われわれは神を誤って解釈している。神は新しきものを創造し、われわれに、人為的な束縛を廃棄し、達成された成果を誇ってそれに甘んじてしまうことなく、つねに自発的であることを求めている。自発性の原理は、あらゆる存在、またあらゆる価値の窮極的な源泉である。自発性は、いずこにおいても、生命と成長、自由と生産力の創造的活動である。あらゆる自発的推進力は創造主の中にある。

神は最大限の自発性を呼び起すことが出来る。その自発性はすべて創造力となつていく。神の住む世界は自発性と創造力が最大限に表出しうる楽園である。あらゆる生命体は、かような最大限の自発性と、固定された硬直的な文化蓄積物（コンサーヴ）（そこには自発性はみられない）とを両極とする価値尺度上のいずれかの位置に現われる。したがつて、われわれの自発性が高まつたときに、われわれははじめて創造主とともに共同創造主（co-creator）となりうるのである。またわれわれは、われわれの自発性と創造性をできうる限り自由に表出しうるような社会を築き上げることによつて、われわれの社会を神の住む理想社会に近ずけることができるのである。ソシオメトリーの方法と諸技術は、かような理想社会建設のために考案された実践用具である。

以上のように、モレノの提唱する自発性の原理は、神学が実験的方法を発達させるに必要な基礎を与えてくれる。われわれは、われわれの経験の中に、かような創造的自発性の実験を生かすことによつて、神の本質を発見し、存在の意味を知ることができるのである。(6)

以上は、ジョンソンによるモレノの評価である。彼がモレノの実践学的科学観を高く評価し、また、社会ならびに人間の相互関係を、全体として（as a whole）理解しようとする彼の努力を賞讃する気持はよくわかるが、モレノの哲学（あるいは宗教）が実験神学を発達させる基礎を与えてくれた云々のくだりは、理解に苦しまずにいられない。事実、これまでのところ、彼のように、モレノの難解な宗教観に注目をした学者は非常に稀であつた。

（B）ソローキンの評価について

ジョンソンは神学的な立場からモレノの自発性と創造性の理論に注目したが、ソローキンもまた別の立場からこの理論に関心を示し、これについて論じている。(7)

彼によれば、真に有益な理論というものは、その形成の初期において、必然的にいくたの問題をともなうものであり、また、若干の点に関してより明確な説明が求められるものである。モレノの提唱した自発性—創造性の理論やそれをテストするいくつかの技術は、きわめて精巧に作り上げられており、われわれの研究に多くの示唆を与えてくれるが、これもまた、有益な理論なるが故に、多くの問題を含んでいる。まず第一に問題になる点は、自発性—創造性の概念の曖昧さである。モレノは、自発性の中に偶然の自発性、病的自発性、自由奔放な自発性、無秩序な自発性、真の自発性などがみられ、このうちで、創造性と結びつくのは真の自発性ただ一つである。そして、この真の自発性は、新奇性(novelty)、柔軟性(flexibility)、即興性(on the spur of the moment)、非恒存性(deconservaty)、容易なる自発高揚性(easy warming up)などの特性をそなえた反応や行為の中にその姿を表出すると述べている。一方また、状況に対する適切性(adequacy to the situation)という特性は、真の自発性にとつて基本的要素である。従つて、所与の反応や行為がいかに新奇的であり柔軟的であつても、それが状況に対して適切なものでなければ、真に自発的な反応や行為とはなりえないとも述べている。そのくせ、モレノは、前述のような諸特性をもつて真の自発性の基準と考えたり、また、即興的、新奇的な反応は、蓄積的、硬直的反応よりも、より適切な反応であり、かつ創造的な反応であると簡単に割切つてしまつている。

かような自発性—創造性の概念の漠然とした規定や、新奇性、柔軟性、即興性、非恒存性などの諸特性—真の自発性—反応の適切性—創造性の安直な結びつけにはかなりの矛盾がうかがわれる。たとえば、心理劇の舞台において、容易に自発性を高揚して(edsy warming up)、ただちに表面的に行動を現わすものもいれば、一方なかなか自発性を高揚せず、すぐに表面に行動を現わさぬものもいる。この場合われわれは、モレノの考えに従つて、前者の反

応は容易に warm up したが故に、真に自発的であり、したがつて適切であつて、創造性と結びつき、後者の反応は warm up しなかつたが故に、非自発的であり、したがつて適切でないといいきれるだろうか。おそらく、適切な行動という点に関しては、両者は同じようなものではなかつたろうか。後者は適切な反応をなにもしなかつたが、前者の盲滅法な反応は、結局適切な反応をなにもしなかつたのと同じことにならないだろうか。同じような疑問は「反応の新奇性」という特性についても起つてくる。2+2=7という反応や気狂いが示す異様な反応は、2+2=4という反応や正常人の当り前の反応よりも、たしかに新しく、奇抜である。この場合もやはり、前者の反応は新奇的であるが故に、真に自発的であり、したがつて適切であり、後者の反応の方はそうではないといえるだろうか。これと全く同じことは柔軟性、即興性、非恒存性などの特性についてもいえる。要するに、モレノは、これらの諸特性は、真の自発性の外徴であり、このような外徴をそなえた反応は、適切な反応となり、創造性と結びついていくと安易に考えているが、上述の例でもわかるように、反応の適切性と創造性の原理は、これらの外徴とは余り深い関係がないようである。この点に、モレノの考えの甘さがうかがわれる。

かようなモレノの考えの甘さと関連して、心理劇によるS要因—C要因（自発性の外徴から推測する）のテストやその訓練の限界が考えられてくる。すなわち、モレノの心理劇は、舞台の上において示されるひとびとの行動から、自発性の外徴の有無（彼等の行動が柔軟的であるかどうか、新奇的であるかどうかなど）を観察し、それによつてそのひとたちの反応の適切性、真の自発性、創造性などを調べ、また、自発性の外徴がみられるような反応をとらせるように訓練することによつて、彼等の真の自発性を高めさせ、反応を適切にし、創造性を発揮させることをねらいとしている。しかし、自発性の外徴—真の自発性—反応の適切性—創造性の結びつきが、前述のように不明確であるなら

ば、自発性の外徴のみられることが、かならずしも、その反応の適切性を保証し、真の創造性の存在を立証することにはならない。従つて、モレノの心理劇による自発性—創造性のテストや訓練は、反応の適切性や真の自発性—創造性をテストし訓練するというよりは、自発性—創造性の「旅の道連れ（fellow travelers）」[8]（すなわち前述のような諸特性）をただテストし訓練しているにすぎないのである。ここに今日の心理劇の一つの限界がみられる。

さらに、モレノの心理劇テストには、他の心理学的テストにみられると同じような、時間的空間的制抑が課せられている（もちろん他のテストよりははるかにましではあるが）、すなわち、モレノがなんといおうと、心理劇テストもまた、人工的な状況（心理劇の舞台）のもとにおいて、限られた時間内に実施されるテストであることには変りない。ここに問題がある。たしかに、偉大な発見や創造は、瞬間的に頭に閃めいた霊感（inspiration）に基ずく場合が多い。しかし、この閃きは、われわれが欲するときに、いつでも生起するものではない。きわめて優秀な頭をそなえた天才や発明家ですら、この霊感を求めて、数時間を、いや数日数ケ月を空しく費してしまうこともある。そうかと思うと、全然予期していないときに、夢の中で、湯船の中で、あるいは人込みの街を歩きながら、霊感が湧き上つてくることも稀ではない。このように、創造的瞬間の生起は、元来気まぐれであり、本人ですら予見不可能なものである。この気まぐれな創造性を心理劇の監督者の導びきによつて、容易に目覚めさせ、テストすることができると考えるところに無理がある。たまたま劇の進行中に眠つていた創造性が呼び覚まされたとしても、このように人工的なテスト状況のもとで、限られた短い時間の間にあらわされる創造性は、かなり程度の低い創造性である。こんなちつぽけな創造性をみつけて、それを過大評価することは慎しまなければならない。[9] 本当に高級な創造性というものは、現実の複雑な生活場面で、かなり長い期間観察しなければ容易に発見できるものではない。心理劇にみられるかような誤り

は、とりもなおさず、今日流行している科学思想の誤りの反映である。昨今の科学的研究の多くは、最も単純な要素的単位から出発して、だんだん複雑な形式、過程、構造へと進んでいくことを定石としている。しかし、このような研究の手順は、かならずしも有益なものとはいえない。むしろ、複雑な現象がもつ性格を注意深く研究し、それを通して単純な要素的現象を理解した方が、より正しい理解に到達することができる。モレノの提唱する自発性―創造性の研究においてもこれと同じことがいえるのではないか。

以上は、モレノの自発性―創造性の理論およびそれをテストする技術にみられる若干の問題点であるが、モレノの理論にはさらに根本的な欠陥が認められる。それは自発性と創造性の独断的な結びつけである。モレノは自発性と創造性をただ一義的に結びつけている。彼の概念においては、真の自発性と創造性とは、ほとんど同じようなものである。もし違いがあるとすれば、真の自発性は、創造性の源泉としての、あるいは両親としての役割を課せられているという点だけであろう。しかし、新奇性や創造性の特性をもつことのできる自発性（真の自発性）は、モレノによれば、ただ一つであり、他の自発性は創造性と全く関係がない。一方また、現実にみられる創造性の中には、自発性の成分をほとんど感知できないような創造性もある。したがつて、総称的にいわれる自発性と創造性の両概念は、同一過程内の二つの異つた段階であるだけでなく、おたがいに独立的な二つの過程であり現象であると考えた方が自然である。それ故、両過程は別個にとりあげられ、各過程の構造機能的特性や、また他の現象への諸関係が、独立的に研究された方が、両概念の将来の発展にとつて、もつと明るい期待がかけられるのではないだろうか。たとえば、実際には創造活動に重要な役割を果しているにもかかわらず、モレノの「自発性アプローチ」では比較的に軽視されていた非自発的要因の意義や、それらの要因と自発性との関係なども、かような研究を通して、いつそう明白になつてく

るだろうし、創造性の触媒剤（catalyzer of creativity）を自発性だけに限定してしまうようなモレノの誤れる考えも、おのずと改善されてくるだろう。

以上は、ソローキンによる、モレノの自発性――創造性の理論およびそれをテストする心理劇についての評価であるが、これは評価というよりは手厳しい批判である。[10] しかし、批判の的となつたモレノの自発性―創造性の理論が、果して、ソローキンによつて正しく解釈されているかどうかは問題である。事実、モレノはソローキンの批判に答えて、[11] 自分の考えている自発性は、ソローキンによつて解釈されたようなものではない。自分は、自発性を三つの型に分けている。それは、(1) 病的自発性――適切性はほとんどみられないが新奇的な反応 (2) ステレオタイプ型自発性――強制的に同じことを繰返してはいるが適切な反応 (3) 高級な創造的自発性――人を刺戟する新しい状況に対する適切かつ創造的反応の三種類である。このうちで、自発性、創造性、適切性の三者が、もつともよく調和した結びつきを現わすのは、たしかに、第三の高級な創造的自発性（いわゆる真の自発性）である。しかし、自分はソローキンのいうように、この種の自発性だけが創造性と結びつくものとは考えていない。気狂や子供の示す病的なあるいは自由奔放な自発性は、不安定であり、断片的であり、分裂的ではあるが、それが創造性と結びつかない自発性だとは決していえない。歴史をふりかえつても、かような自発性が高度の創造性を産み出した例は少なくない。キリスト教、仏教、回教などの多くの聖者にみられる自発性、気が狂つたニーチェ、アル中のポーなどの示した自発性などはその良い例だろう。また、ステレオタイプ型の自発性についても同様、全く創造性を伴わないとはいえない。ステレオタイプ的な反応それ自体は、文化蓄積物の機械的な繰返しであり、その再生産であるかもしれない。しかし、その反応は、いつか他のひとびとの自発的創造性を呼び覚すかも知れない。完全に霊感だけで産み出された偉大な創造

性の産物というものは稀にしかみられない。こういう意味で、この第二の型の自発性も創造性と結びつくものである。このように、あらゆる型の自発性は創造性と必ず結びつけられる。したがつて、自発性と創造性とを結びつけることは決して間違つていないと反論している。

このほかにもさらに、(1) ソローキンが指摘した非自発的要因の研究は、素晴しい示唆であると思うが、「創造性をもつた蓄積物」の考えには驚く。蓄積物は、自発性という媒介要因なしに、それ自体創造的にはなりえない。したがつて、自発性の成分をまつたく感知できないような創造性があるという考えはおかしい。(2) 神は別として、人間の水準においては、文化的蓄積物の影響を受けないという人はありえない。しかも文化的蓄積物は、それ自体では恒常的であり、したがつて予見することができる。われわれの自発性は、文化的蓄積物の再生産を起させるために、その蓄積物と結びつけられる。このように人間の行動は、文化的蓄積物の影響を受ける限りにおいて、予見が可能である。(3) ソローキンは、現在の—そしてモレノの—科学的用具や実験的方法を批判しているが、批判それ自体が目的であつてはいけない。自分も今日流行のテスト方法や実験室的実験を批判したが、自分の場合、批判は目的への単なる手段にすぎなかつた。自分は、批判のあとで、自発性—創造性の理論の仮定に導びかれ、既存の用具よりは優れた用具を発達させようと試みた。もちろん、完全であり、しかも有用であるような社会学的用具はありえない。だが、社会科学における科学的用具が、いまだ適切でなく、信頼性が薄く、充分に科学的でないということは、科学的用具が必要とされているという実情を変化させてしまう理由にはならない。問題は、その用具があることが、何もないよりはましかどうか、また、その用具が改善することができるかどうかということにあるなどの点を反論している。

しかし、モレノが考えるように、ソローキンが彼の理論を誤つて解釈し、また、その文献を充分に消化していなか

つたとしても、その責任は決してソローキンだけに負わせられるものではない。元来モレノの理論は、彼の自由奔放な自発性のゆえに、即興的であり、新奇的であり、柔軟的である。そしてきわめて飛躍的でもある。したがつて、その理論は場合場合によつてかなりニュアンスが違つてくる。一見どこからでも自由に切り込めるようにみえるが、どこにでも逃路が隠されている。だから、これを批判するものはたいてい肩透しをくらつてしまう。しかし、このことは、裏を返せば、彼の理論がいかに曖昧であり、一貫性に欠けているかを物語つている。これでは、理論の発展と精練化は望めない。モレノの理論がかなり面白い要素を含んでいながら、今日ほとんど顧みられない理由は、こんなところにもあるのではないだろうか。

(C) ヴィーゼの評価について

かつてアロン(R. Aron)が「ギュルヴィッチは、ソシオメトリーをもつて小集団の『微視的社会学』を確証するものとし、またレオポルド・フォン・ヴィーゼは、関係学を補うのに適していると思われるこの新しい方法を力強く示した。小集団の社会学は社会学の貴重な充実化を示すものである。……(中略)……体系社会学の理論的問題は、ソシオメトリーと切り離しえず、そしてソシオメトリーは、とくにすでに出来上つた概念の精密な検査を可能にし、理論のスコラ的膠着を防止することができる」[12]と述べているように、第二次大戦以後、ソシオメトリーは、ヨーロッパの学界に急速に滲透し、多くの学者の注目を浴びた。ここに述べようとするドイツのレオ・フォン・ヴィーゼは、フランスのギュルヴィッチとともに、この新分野の研究にもつとも強い関心を示した社会学者のひとりである。ヴィーゼが、はじめてソシオメトリーについての見解を示したのは、一九四八年に発表した「ゾチオメトリーク」[13]であるが、そこに示されたヴィーゼの関心は、ソシオメトリーの難解な理論に向けられていたというよりは、それが

もつ人間関係分析用具としての意義、ならびにその実践的な科学観に向けられていたといえるだろう。しかしながら、彼はまた、同じ論文の中で、自発性にもとずいた人間関係理論の社会学への貢献とその限界についてもふれているので、筆者は、この点をソシオメトリー理論の一つの発展方向と考え、あえてここで取りあげてみることにした。

さて、ヴィーゼが自発的人間関係理論の貢献をいかに評価し、またいかなる点にその限界を見出しているかの紹介に入るまえに、形式社会学者として知られている彼が、いったいどんな理由で、ソシオメトリーの実証的調査技術に興味を覚え、またその実践的科学論に心をひかれたかについて、少しふれてみよう。

いうまでもなく、ヴィーゼの社会学は人間関係の学である。彼によれば、社会という実体はどこにも存在しないし、またそれは固定的なものでもない。有るものは、社会的なものと呼ばれる複合的な生起であり、時間的、空間的に演ぜられる人間の人間にたいする作用だけである。[14] したがつて、この社会的なもの（Das Soziale）、間人間的なもの（Das Zwischenmenschlichen）を対象とし、人間間の社会関係（soziale Beziehung）およびその関係が濃縮し結晶したものとしての社会形象（soziale Gebilden）を、経験の場において、客観的、没価値的に考究していこうとするのが彼の関係学（Beziehungslehre）の課題である。

さらに、彼が社会関係という場合、その関係は、たえず結合と分離が行われる流動的な社会過程（soziale Prozessen）のうちに、おのずから形成される一時点の成果と考えられる。いいかえるならば、社会関係は社会過程の瞬間的な静止状態における横断面といえよう。一方、社会過程は、大きく分けて、結合に向う過程、分離に向う過程、おのおの程度を異にする多くの結合・分離の併存する過程とに分類することができる。またこの社会過程（P）は、それに関与する個人の態度（H）と彼が置かれた状況（S）との函数 P＝H×S によつてあらわされる。さらに、個人

の態度は、生来の素質（I）と一定の経験（E）とからなり、状況は、物的所与（U）と他の人間の態度（H_1）とからなつているので、前式は $P=I\times E\times U\times H_1=I\times E\times U\times(I\times E)_1$ と書き改められる。彼は、かような社会学的分析方式を用いることによつて、複雑な社会的現象をすべて分析していくことができると考えていた。[15] 要するに、ヴィーゼみずからが「人間間には二つの基本的関係がみられる。一つは牽引と共同の関係であり、他は反撥と排斥の関係である。すべての関係および関係形象は、結合と分離という要素的過程に還元される。人間間のからみ合いは、二つの（概念的には結合と分離の）基本的運動の頻繁な変化と相互的な滲透に還元される。したがつて、われわれはすべての社会過程を、(1) 結合過程、(2) 分離過程、(3) ある点に関しては結合的であり、他の点に関しては分離的な過程、とに区分する。この区分は社会学固有のものである。したがつて、間人間的事象の研究は、その事象の中に起こつてゆく結合過程、分離過程、または結合と分離との結びつきを観察することによつて、社会学的研究となるのである」[16] と述べているように、彼の関係学は、まず、研究対象を社会関係および社会形象に限定し、その関係や形象を、結合と分離という根源的な社会過程に還元し、逆に今度は社会過程から関係や形象を説明して、それらを詳細な社会関係表に整理分類し、また体系化していくことを目的としている。しかも彼の場合、その関係の分析は、フィーアカントのような現象学的方法による分析ではなく、あくまでも経験の基盤のうえでの客観的な分析である。したがつて、彼のいうように「方法論的にいえば、関係学の課題は、社会的事象の質的差異をできよかぎり量化しようというくわだてをもち、その諸事象を、量的差異しか存在しない少数の明白な線に配列しようとすることである」[17] ということになる。

以上はヴィーゼの提唱する関係学の概要であるが、それが狙つている、(1) 社会関係ならびに社会形象の結合—分離過程への還元と (2) 経験の基盤に立つた客観的（量化的）分析の二点には、あきらかにソシオメトリーと結びつ

く要因がそなわつていたとみることができるだろう。事実、ヴィーゼは前掲の「ゾチオメトリーク」においてつぎのように述べている。「関係学が、医師モレノ創作であるソシオメトリーにおいてみられるほど、その基礎的思想に強い支持と確認を受けたことは稀である。もちろん、こう述べたことに対しては、その意味にさらにつつこんだ解説ともつと正確な分析を与えることが必要である。私は、その著作（誰が生き殊るか……筆者註）を読んだ後でも、関係学の創始者からいまだソシオメトリストにはなつていない。しかし私は、この方法（ソシオメトリーの方法……筆者註）が、より包括的な領域の枠の中にある他の方法とならんで、社会過程の学説に一つの重要な意義をもたらすものであるということを信じている。モレノの著作の基礎的部分や結論的部分には、私の意図した説述とほとんど一致するようなところがみられる。われわれは、社会学は基礎的には人間間の関係学であり、そしてこれら諸関係によつて形成される社会過程は結合と分離の過程であり、また社会形象はかように生成された社会関係の堆積物であるという考えにおいて、全く一致している。モレノは、彼の研究の基礎に社会重力の法則（Gesetz der sozialen Gravitation）を仮定したが、彼はそれを、われわれの見解と同じように、牽引（Anziehungen）と反撥（Abstofzungen）の交代の中に認めている」[18]かように関係学とソシオメトリーが、ともに人間関係の解明をその研究の中心課題とし、しかも、その関係を結合と分離、牽引と反撥の過程からとらえていこうとしたところに、理論上、両者が提携する必然的な根拠があつた。もちろん、このことは、両者の理論が全く同じ出発点に立つたということではない。どちらかというとモレノは、牽引・反撥（あるいは結合・分離）の作用の根源として自発性という個人の心的要因を重視しているが、ヴィーゼの方は、むしろ外的（社会的）要因を重視している。この違いが、ヴィーゼによるソシオメトリー批判の対象となつた。

さて、一方、ヴィーゼが、彼の関係学を現象学的な方法ではなく、あくまでも経験の基盤のうえで、客観的、没価値的に考究していこうとしたことは、前にも述べた通りである。彼のこのような立場は、「了解（Verstehen）」によるアプローチを重んずる社会学者達によつて、強く批判されてきた。それにも拘わらず、彼は社会的事象の質的側面を量的に還元することを考えつづけてきた。就中、結合と分離の社会過程によつて生成される社会関係の距離化という問題は、つねに彼の頭から離れなかつた。ここにもまたソシオメトリーと関係学が結びつく基盤があつた。そしてソシオメトリーの測定技術は、彼の満しえなかつたこの欲求を見事に満してくれたのである。このような事情は「関係学の立場からいつて、量化への傾向は歓迎すべきことであつた。社会過程の質的内容を歪めることなく、できる限り観察の同一次元内で量的差異に変形することは、私にとつて、科学の真の目的であるように思える。結局、あらゆる科学の中核は数学である」[19] そして「このオリエンティールング（モレノの測定方法……筆者註）からえられる利益は、それが、社会領域での実験は不可能であるというドイツに広くいきわたつた迷信を反駁していることにみられる」[20]と、ヴィーゼ自身によつて語られている。

以上は、関係学とソシオメトリーの提携を可能ならしめた主な理由であるが、もう一つ見落すことのできない事実は、両者が科学の実用化ということについて共通の関心をもつていたということである。モレノが科学の実用化あるいは実践化ということに強い関心を抱いていたことは、すでに「ソシオメトリーの発展と今日の諸問題（その一）」において述べた通りであるが、ヴィーゼもまた、モレノと同じような関心を抱いていた。秋元氏も「すでにヴィーゼは『一般社会学体系』（System der Allgemeine Soziologie）をあらわしたとき、関係学を貫く課題が、実際生活への適用、奉仕にあることを繰返し述べている。そしてそれが戦後の『社会生活における依存と自立』において、さらに具体化

されたかたちで展開されていたことも、さきに指摘したとおりである。ところがここで彼は、さらに理論的もしくは技術的側面からだけでなく、実践課題――とりわけ集団治療の問題から、ソシオメトリーへの意欲的な接近をみせるのである」[21]と述べているが、ヴィーゼが、ともすれば観念の遊戯に終りがちなドイツ社会学にあきたらず、つねに現実の社会に目を向け、科学の現実生活への適用を夢にえがいていたことは事実のようである。ヴィーゼが「真実は生活から離れた単なる観念の場における、抽象的論理の遊戯によって見出されるのではなく、実際生活を観察し、なおかつ、分析と綜合に理論の道具をさずけることによって見出される。」[22]と述べたのは、このような気持の一つの表れではなかろうか。かような科学の実用化に対する強い意欲が、彼をしてソシオメトリーに注目させ、また「モレノは実用的な人間治療の科学を発達させ、同時に理論的知識をその治療に適用しようと試みている。ソシオメトリーは社会学の理論というよりは、むしろ事実観察の方法と考えられる。ここにおいてまた、彼は関係学と全く一致する。そして関係学のより広範な理論的基礎は、その処理法に関して、ソシオメトリーの助けとなることができ、またあまりにも急速に発展したその理論的枠組を補強することができた。しかし、その代償としてソシオメトリーは、ドイツにいるわれわれが、その外的事情の力によって達しえなかった実用的応用に関しいろいろとテストされた経験を与えてくれる。」[23]と語らせた一つの原因であったと考えても間違いではないだろう。

以上、形式社会学者としてのヴィーゼが、ソシオメトリーの実証的調査技術に興味を覚え、またその実践的科学論に心をひかれたいくつかの理由をあげてみた。では、ソシオメトリーにこのような強い関心を抱いたヴィーゼが、モレノの自発的人間関係理論をどのように評価しているだろうか。

さきにも述べたように、ヴィーゼは、ソシオメトリーが関係学と同じように、人間関係の基礎を結合（＝牽引）と

分離(＝反撥)の過程に求めたことを優れた見解と賞讃しているが、一方では、モレノの牽引-反撥の理論が徹底的な心理主義の立場に立つていると、これ強く批判している。彼によれば、集団過程を理解し、これを再建しようとするには、牽引と反撥の総和を知つただけでは充分でない。社会的領域の中で経験される個々の事象は、諸関係のネットワークの中に織り混つて成立している。それらは、この枠組の中で、機能、課題、目標、目的をそなえている。そして、これらの諸力は社会過程の参与者の一時的な傾向や態度(モレノの場合、個人の牽引—反撥の傾向や態度)よりも、はるかに社会過程に対し強い影響を与えている。またこれらの諸力は、規範として、客観的拘束として、社会過程の推進者に立ち向う。ズナニエッキィの表現を借りるならば、社会領域の中には「axionormative Ordnungen」が存在する。もちろんこれらの秩序を、社会過程の推進者の性格を規定している自我の理想の方向に変えていくことは可能である。しかしながら、これらの秩序は、いま現実に、社会過程に対し、強力に働きかけており、われわれはこれを無視することはできない。モレノの人間関係論は、心的領域に生起する自発性を強調するあまり、かような社会的拘束力を軽くみすぎている。彼が行つた諸研究や彼の設定した諸仮定は、暗黙のうちに、社会的なものと心的なものとは同一であり、すべての事象は個人の自発性の要因に帰せしめられることを語つている。要するにモレノは、せつかく「人間間の(between men)」という言葉の意義を強調しておきながら、おしげもなく、それを「人間内の(within mam)」の問題に消し去つてしまつたのである。[24] もちろん、関係学は、心理的過程を無視しようとしているのではない。しかし、それを研究することは、真の存在の領域を認識するための一つの仕事にすぎないと考えるのである。いいかえるならば、関係学の立場は、社会過程およびその他の社会的諸事象を、axionormative Ordnungen と個人の牽引—反撥の二つの原理系列からみていこうとするのである。この点、関係学は、モレノとデュルケームによる対立の中間に立

つているといえるだろう。

以上が、ヴィーゼによるソシオメトリーの評価と批判であるが、これと同じような批判はズナニエッキやガイガーなどの多くの学者（とくに社会学者）によつてもなされている。もちろん、モレノはこのような批判に対して黙つてはいなかつた。彼はそれに答えて、自分は感情だけが人間関係の構造を規定する要因とは考えていない。客観的な基準、要求、価値、目的、技術、能力などは、ソシオメトリーの方法において欠くことのできぬ重要なものだと思つている。このことは繰返し繰返し指摘したはずだ。ヴィーゼによるこのような誤解は、彼が、ギュールヴィチと同じように形式理論家であり、いつも、人間によつて作られた発見や操作や実験よりも、その表現の文法や論理を追うくせがあるという事実に基ずいて起るのではないだろうかと述べている。[25] しかしながら、モレノがいかに弁解しようとも、彼の著作から、彼がはたしてどの程度に axionormative Ordnungen や culture atom と称する要因を重要視しているのか、また、それと spontaneity をどのように結びつけているかを、はつきり理解することは難しい。

（ヴィーゼによる評価を書くにあたり、早稲田大学秋元律郎氏からいろいろと御教示をいただき、また文献借用のお世話をいただいた。氏の友情に対し深く感謝する）

註(1) Moreno, J. L. The sociometric school and the science of man. *Sociometry*, 1955, 18, p. 18.

(2) Loomis, C. P. & Pepinsky, H. B. Sociometry, 1937～1947; Theory and method. *Sociometry*, 1948, 11, p. 282～283.

(3) 外林大作「ソシオメトリー」（馬場明男　早瀬利雄編「現代アメリカ社会学」）昭和二九年　二九五―一九六頁

(4) Moreno, J. L. Preludes, in *Who shall survive?* 1953, (revised) p. xiii～cxiv

(5) モレノのこのような努力に関しては、佐野勝男　関本昌秀「ソシオメトリー研究の発展と今日の諸問題（その一）――モレノのソシオメトリーの背後にあるもの」哲学第三十五集　慶応義塾創立百年記念論文集　昭和三十三年　五〇九――五三四頁を参照していただきたい。

(6) Johnson, P. E. The theology of interpersonalism. *Sociometry*, 1949, 12, 225～234.

(7) Sorokin P. A. Concept, test, and energy of spontaneity-creativity, *Sociometry*, 1949, 12, 215~224. Sorokin, P. A. Remarks on J. L. Moreno's "Theory of spontaneity-creativity". *Sociometry*, 1955, 18, 374~382

(8) Sorokin, P. A. ibid. (1943) p. 220.

(9) ソローキンに批判されるまでもなく、モレノはこの点を充分認識している。すらわち、彼は Moreno, J. L. Theory of spontaneity-creativity, *Sociometry*, 1955, 18, p. 361~374. において「われわれは高級の創造性や自発性を実験状況の中に再現させることはできない。高級の創造性と自発性は、生活それ自体においても稀なものであり、また観察することは難かしい。それらは実験状況の中で稀にしか起らない。しかし、われわれは、コントロールが可能な環境において、中級のあるいは低級の自発性を喚起することはできる」(p. 363) とか「(自発性や創造性に関する) 実験を可能にするためには、われわれは進んで妥協し、現実生活に近い状況を擬装するよう心がけねばならない。もし研究者が進んで妥協せず、非常に高い水準の自発性と創造性の研究に自分を閉ぢ込てしめまうならば、彼は創造性を試験管にいれ、近い距離からそれを測定し観察する事はできないだろう。職場関係、家族関係、商取引関係など人間の日常生活において重要なのは、一般的で些細なタイプの創造性なのである。」(p. 369) と述べて、心現劇などの諸技術で取扱うことのるでき創造性の限界を明らかにしている。

(10) ソローキンは前註掲載の二冊の論文において「われわれは、その創造性の理論およびこれを研究しテストするいくつかの技術において、モレノに負うところが多い。……ここに述べた批判は、モレノの理論の中心的、妥当な部分に関して質するものではない。それは、妥当な部分から問題を含み価値を低めてしまうような要素を切り離すことだけを目的としている」(Sorokin, P. A. ibid. (1943) p. 224) とか「私の批判や不信は、主として、モレノの自発性—創造性の理論の二次的な末梢的な部分に関するものであることを繰返し述べておきたい。人間について知られているある現象を、なるべく機械的にではなく、超自然的に研究していこうとするわれわれの基本的研究法は本質的に同じ性質のものである」(Sorokin, P. A. ibid. (1955) p. 381.) と述べているが、果してモレノの理論のどの点を中心的、妥当的部分と考え、それを高く評価しているのか筆者にはよくわからない。

(11) Moreno, J. L. System of spontaneity-creativity-conserve; A reply to P. Sorokin, *Sociometry*, 1955, 18, 126~136.

(12) Aron, R. La sociologie allemande contemporaine, 1950. 秋元律郎、茅仲和夫、河原宏共訳「現代ドイツ社会学」

一一一五―一一六頁

(13) von Wiese, L. Soziometrik, *Kölner Zeitschrift für Soziologie*, 1948～9, 1, 23～40. なおこの論文は、業績「ソシオメトリー」に同じ表題で、その大部分が再録されている。von Wiese, L. Sociometry. *Sociometry*, 1949, 12, 202～214. 本稿の引用文は原典であるドイツ語文献に頼ることにした。

(14) von Wiese. Beziehungssoziologie, im Vierkandt *Handwörterbuch der Soziologie*, 1931, S. 66.

(15) von Wiese, L. *System der Allgemine Soziologie-Als Lehre von der sozialen Prozessen und der sozialen Gebilden der Menschen*, 2 Auflage, 1933, S. 155～156.

(16) von Wiese, L. *Allgemeine Soziologre-Als Lehre von dcr Beziehungco vnd Beziehungsgebilden der Menschen*—1 Teil, 1924, S. 10.～11.

(17) von Wiese, L. ibid. S. 8.

(18) von Wiese, L. Soziometrik, *Kölner Zeitschrift für Soziologie*, 1948, S. 23～24, or Sociometry, *Sociometry*, 1949, 12, p. 202～203.

(19) von Wiese, L. Soziometrik, *Kölner Zeitschrift für Soziologie*, 1948, S. 26, or Sociometry, *Sociometry*, 1949, 18, p. 205.

(20) 註 (19) に同じ。

(21) 秋元律郎「現代ドイツ社会学研究」昭和三十五年　三五―三六頁

(22) von Wiese, L. *System der allgemeine Soziologie*, 1933, S. 612.

(23) von Wiese, L. Soziometrik, *Kölner Zeitschrift für Soziologie*, 1948, 1, S. 25, or Sociometry, *Sociometry*, 1949, 18, p. 204.

(24) von Wiese, L. ibid. (1948～9) S. 24, or ibid. (1949) p. 203.

(25) Moreno, J. L. Concerning criticisms of sociometry and the sociometric movement. *Sociometry*, 1955, p. 32～33.